

出産に関わる里帰りと養育性形成

学位論文内容の要旨

出産前後の里帰りは、他の先進国にはみられないわが国独特の習慣である。これまでこのテーマは、民俗学において研究されていたが、心理学分野ではほとんど注目されてこなかった。そして、主として医学・産科学の分野において周産期の医学的問題として否定的な見解が示されてきた。これは、1970年代後半、産科医療施設において里帰り分娩者に異常の発生頻度がやや高いことに産科医師らの注目が集まったことから始まった。そして、産科学的異常のみならず、初期の夫婦・親子関係の確立の阻害要因になると強調されてきたのである。その後、医療の発展及び地域病院との医療格差の是正により、里帰りとは非里帰り分娩間の産科学的異常の発生頻度に差はなくなった。しかし、夫婦・親子関係の確立に関することのみは問題視され続けてきた。戦後、高度成長期の日本は、急速な都市化と核家族化が進み、地域近隣との関係は希薄化し、子育ての環境は大きく変化した。そして、出産の場所は1970年代に自宅から病院施設へ完全に移行した。この頃は、多くの日本の伝統的習慣が失われると共に、価値観や家族観も変化していったのであるが、その中で里帰りは、現代も産後の休養と精神的安定の場として産後の多くの女性に求められ、残り続けている習慣である。このことから、里帰りには、出産直後の最初期の子育てにおける支援資源としての役割があるのではないかと考える。しかし、子育てを支えてきた地域共同体が崩壊し、子育ての環境が激変した現代においては、里帰りの役割や持つ意味もまた変化してきていると思われる。

本論文では、医学・産科学的見地から否定的に捉えられてきた出産に関わる里帰りを、子育て支援と親子関係・母性性の発達の見点から捉え直し、里帰りが発達の最初期における養育性形成に果たす機能及びその機能と役割をある程度確保するための課題と助産師の役割について検討することを目的とする。本論文の第1章及び第2章では、現代日本の少子化の進行と子育て環境の変化及び核家族の育児状況から養育性形成に関わる問題を述べる。そして、日本の産育習俗や子育てについての歴史から出産に関わる里帰りの概念を整理し、現代も習慣として残り続けていることの意味を捉える。さらに、周産期医療の中で里帰り分娩が親子関係の発達の阻害要因と指摘された経緯と根拠を調べ、母性性の発達の見点からこの評価の妥当性を検証する。結果より、現在では里帰り分娩の医学・産科学的リスク要因はすでに低く、親子関係の発達の阻害要因となるという明らかな根拠はなかった。そして、母親となることの発達の視点から捉え直した里帰りは、現代も母親となることを支える儀礼的な場として存在し、その中で、産婦の実母には他の伝統的社会にみるような「母代わり (allomother)」の役割があると考えられた。

後半の第3章及び第4章は、これらについて実証的な研究を行った結果を示す。第3章では、核家族化が進んだ都市における里帰り慣行と育児の実態調査の結果を報告している。調査地は

北海道札幌市，調査対象は4ヶ月までの乳児を持つ女性350名である。結果，里帰り慣行は現在も非常に高い割合で行われていることが明らかとなった。また，育児に関する不安の内容からは，里帰り後に生じる育児不安への対応の必要性が示された。第4章では，里帰りを体験した女性の心理的变化や母親としての成長のプロセスをみるために，15名の女性の主観的な経験の「語り」を，親子関係及び母性性の発達の視点から分析を試みた。結果，里帰りには，産後の身体的休養，母となる自信を得る，経験者である実母を師匠とした育児の見習いと伝承という子育て支援の機能があることが明らかになった。また，里帰りは「当然行うもの」という考えが今も根強いことがわかった。一方，その機能を損なうものとして，世代間の育児観の相違や過去の葛藤の想起などから親子関係の問題が生じる場合もあることが明らかとなった。

結論として，養育性形成の視点から捉えた里帰りの場は，産褥期の母性保護の場であり，産婦が新しく母親役割を獲得し，その母親は養育者となった娘の母親となるという重層的な親子関係の発達課題を達成する「母となる通過儀礼の場」であると考えられた。そして，里帰りは，親子が「母と娘の徒弟制」を通して育児を伝承し，さらに経験ある母親の導きによって産婦が母親らしさを形成する場であった。それは，新たな養育者が生み出されることを助ける最初期の養育性形成の機能を果たすと考えられる。しかし，「里帰り」が養育性形成の機能を果たすためには，「ほどほどに良い親子関係」が前提条件となる。また，親子関係のトラブルや葛藤的な問題の呼び起こし，そして里帰り後に援助が途切れることによって生じる育児不安の問題は，里帰りの養育性形成の機能を一部損なうことになりかねない。このため事前の親子関係の調整や里帰り後の心理的援助を含めた継続的援助，里帰りが可能でない場合の個別的な援助など，専門家による介入の検討の課題があり，妊娠・出産から産褥期までに至る関わりを持つ産師には，これらの課題解決のための役割があると考えられる。

論文の構成

本論文は，以下のように構成されている。

序章 問題意識

第1章 現代日本における子育てと養育性形成に関わる問題

第2章 産育の習俗としての里帰りとお産の医療化の中の里帰り分娩：

里帰りの概念の整理と発達の視点からの意味の捉え直し

第3章 里帰り慣行の実態と子育て初期の支援の問題：札幌市における実態調査

第4章 里帰りを体験した女性の「語り」からの分析

第5章 総合考察と結論

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 陳 省 仁

副 査 教 授 佐 藤 公 治

副 査 教 授 松 岡 悦 子 (奈良女子大学)

副 査 教 授 甲 斐 仁 子 (藤女子大学)

学位論文題名

出産に関わる里帰りと養育性形成

本論文は助産師である著者が日本社会におけるお産関連の里帰りの実態について、発達心理学の立場から、特に養育性形成の問題と関連づけながら実証研究を行ったものである。論文は序章と5つの章で構成されている。序章において問題意識と研究目的が述べられた。第1章及び第2章では、現代日本の少子化の進行と子育て環境の変化、核家族の育児状況から養育性形成に関わる問題を指摘し、発達心理学的視点から、これまで民俗学と産科・助産学など医療との関連でしか取り上げられてこなかったこの制度・習慣の現代的意義について述べた。高度経済成長期の1970年代において「里帰り分娩」は医療・産科学関係者にとって異常出産に導くリスクのある制度として批判の対象となったが、その後の比較研究の中で、里帰りを行った産婦やその子どもの予後は指摘されたほどの問題はないことが判明した。第3章は札幌を中心とした地域における350名の里帰り経験者を対象者とした里帰りの実態調査に基づく報告であった。第4章は里帰りを体験した初・経産婦の主観的な経験についての「語り」を親子関係の発達と母性性の発達の視点からの分析で構成した。第5章の総合考察と結論において著者は、現代日本の里帰りは産褥期の母性保護の場であり、産婦が新しく母親役割を獲得し、産婦の母親は養育者となった娘が母親となるという重層的な親子関係の発達課題を達成する「母となる通過儀礼の場」と結論した。更に、里帰りの実践を新たな養育者が生み出されることを助ける最初期の養育性形成の機能を保証するための課題と提言もした。

本論文は著者が助産師という独自の立場から、これまで医学・産科学的見地から否定的に捉えられてきたお産に伴う里帰りという日本独特の習慣・制度の実態を、調査と面接を通してその機能を明らかにし、これらの機能の持続可能性を確保するための課題と助産師の役割について検討した労作である。特に、医学・産科学の領域と考えられてきたこのテーマに、子育て支援と親子関係・母性性の発達の視点を導入し、子育てひいては養育性形成の問題を抱えている現代日本社会に、この習慣・制度が果たしている周産期の母性性の発達支援に関する機能を多数の調査を通して明らかにしたことは高く評価できる。

実態調査の分析から、里帰りは現在も非常に高い割合で行われていることが明らかとなり、また対象者の産後の育児に関する不安の報告からは、里帰り後に生じる育児不安への対応の必要性が示された。里帰りという伝統的な日本の子育て文化の一部が今後の発達初期における母性性の発達支援に役立つ可能性を追求する際、またその機能を強化するための改善課題を具体的に指摘できたことはこの研究のもう一つの貢献として評価するものである。

第4章においては、15名の対象者の里帰り体験についての語りの分析から、体験者自らのことばによる表現で、周産期の数か月における、産婦と自分の母親が新生児を育てるといふ共通課題の取り組みを通して起きている母・新生児及び母・娘関係の変化の輪郭を描き出している。この記述から、里帰りという時間と場所は、産後の身体的休養、母となる自信を得る、経験者である実母を師匠とした子育ての見習い及び身体技術の伝承過程として捉えることが可能になっている。また、多くの出産する女性にとって、里帰りは「当然行うもの」という考えが今も根強いことが明らかになり、一方、この習慣・制度の実践を阻害する要因として、世代間の育児観の相違や母・娘関係における過去の葛藤の想起が生じる場合があることも明らかとなった。しかし、本論文において、里帰りにおける参加者の中で起きていると想定される親子関係及び母性性の発達のメカニズムを捉えるプロセス・モデルについては十分な検討が行われていない。ここが本論文にとっては残された課題となっており、今後、より精緻な説明モデルの構築が求められる。

結論として、養育性形成の視点から捉えた里帰りは、①産褥期の母性保護の場であり、②産婦が新しく母親役割を獲得しその母親は養育者となった娘の母親となるという重層的な親子関係の発達課題を達成する「母となる通過儀礼の場」、及び③親子が「母と娘の徒弟制」を通して子育て文化を伝承し、経験者である母親の導きによって産婦の母親らしさを形成する場と位置づけたことも妥当である。

最後は助産師の立場から里帰りの実践に向けた提言についてである。「里帰り」が養育性形成の機能を果たすためには、「ほどほどに良い親子関係」が前提条件となり、また、母・娘関係のトラブルや葛藤が呼び起こされ、或いは里帰り後に援助が途切れることによって生じる育児不安の問題は、里帰りの養育性形成の機能やその持続可能性を損なうリスクもある。今後の課題として、里帰り前の母・娘関係の調整や里帰り後の心理的援助を含めた継続的援助、また、里帰りが可能でない場合の個別的な援助など、専門家による介入の検討が考えられ、妊娠・出産から産褥期までに至る関わりを持つ助産師には、これらの課題解決のための役割があると考える。但し、今回の研究において、何らかの理由で里帰りを行ってない産婦及び娘の里帰りを受け入れる側の母親は含まれていないことも改善すべき点として指摘しなければならない。

なお本論文の一部である資料及び分析は既に教育学研究院紀要の課題論文として掲載され、または2010年6月発行予定の日本助産学会誌第24巻第1号に掲載する予定である。

以上の成果より、審査委員会は全員一致して、著者は北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。